狭き門から入る（チャペルメッセージ④）

狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。 （新約聖書・マタイ福音書 7 章 13-14 節）

「豚に真珠」、「働かざる者食うべからず」、「禁断の木の実」等、聖書の話に由来する言葉がいつのまにか日本語として定着した例は幾つもありますが、今回取り上げた「狭き門」もその一つです。しかしながら、この言葉は日本語に定着していく過程においてかなり意味が変質してしまっており、日本では本来の意味とは異なった意味で用いられているようです。

「狭き門」と聞いて私たちがまず思い浮かべるのは、難関大学の入学試験等、志願者はたくさんいるのに入学定員が限られているために、競争率が非常に高くなって入りにくくなっているという状況ではないでしょうか。しかしながら、聖書に記されている「狭き門」の本来の意味はそういうことではありません。確かに、その門から入っていくことが難しいために「狭き門」と言われることは確かなのですが、それは決して人気が高く、希望者が殺到するから難しいと言っているのではありません。実際はむしろその逆で、まったく人気がなく、地味で目立たないため、誰も入って行こうとしないという意味で「狭き門」と言われているのです。すなわち、聖書の「狭き門」は、希望者が多いがゆえの「狭き門」なのではなく、むしろそれを本気で目指そうとする人が少ないことに起因する「狭き門」なのです。

事実、この聖書の言葉はこのように語っています。滅びに至る門は広く、その道も広いので、誰もがそこから入っていこうとするが、その一方で命に通じる門は狭く、道も細いので、それを見いだす人も少ない。すなわち、一方の滅びに至る門は広く、そこに至る道も広々としていて入りやすいので誰もがそこから入っていこうとする。事実、こちらの方は居心地も良さそうでかつ華やかであり、また大勢の人と一緒なので安心なのです。その一方で命に通じる門は狭く、そこに至る道も細いので、誰も入って行こうとせず、それだけに目立たず、華やかさや魅力に欠け、また仲間もいないので心細い印象があります。しかし、たとえ困難であり、魅力的に見えなかったとしても、そのような命に至る道、自分を生かす道を選び取るようにこの聖書の言葉は訴えているのです。

ともすると私たちは、安易な道、少しでも楽な道に流されてしまいがちです。もちろんそちらの方が楽ですし、また孤独になる心配もありません。しかし、それだけでは本来の自分の才能を十分に育て、持てる力を発揮することはできないでしょう。時には、自分自身を成長させるためにも、敢えて困難な道を選び取ることも必要なのかもしれません。その意味でもこの言葉は、周囲に流されず、自分に示された道を信じて、しっかりと歩んでいくようにと私たちを促しているのです。

緊急事態宣言が延長される中、私たちは今、不自由な環境の中でストレスを感じつつ毎日を過ごしているかもしれません。しかしよく考えてみると、こういう時であっても出来ることがたくさんあり、また、こういう時にしか出来ないこともあるように思います。その意味でも、こういう時にこそ「狭き門」から入っていこうとする姿勢が大切なのかもしれません。